

特集「がんサバイバーと社会共生：言葉の処方箋」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
分子標的予防医学

武 藤 倫 弘



ついに全国民が「がん予防」を学ぶ時代が到来しました。平成18年12月にがん対策基本法が改正され、国民病である「がん」を学校で教えることになりました。令和2年度から小学校で、翌年からは中学校の教科書に記載され、そしてその翌年（令和4年度）には義務教育だけでなく高等学校でもがん教育が全面実施されています。そしてこの流れは専門教育にも及びました。令和5年度から10年度を対象とした第4期がん対策推進基本計画では「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す」という全体目標を掲げ、大学院生向け教育プランである〈次世代のがんプロフェッショナル育成プラン〉を開始しています。ここでの修学テーマは「がんの予防医療」、「再発予防」、「先制医療」です。小学生から大学院生までがん、そしてがん予防を学ぶ時代となったのはすごい変化であると思います。しかし、ここで学内のがん教育のみで十分と言えるか？という疑問がふつふつと生じ、学外でのがん教育はどうなっているのか、という疑問に答える特集を組もうと思いました。

今回の特集は『がんサバイバーと社会共生：言葉の処方箋』です。学外における「がん」の発信者にはがんサバイバーが多く、その発信の場の一つの形態としてがん哲学カフェがありま

す。がん哲学カフェの立ち位置は、学校教育現場とは違ってもっとフラットで自由であるので、知識の伝達とは違う交流ができるといった特徴があります。がん哲学カフェだからこそ世代を超えて双方向に交流するスペースが生まれることも期待されます。しかし、京都の地にはがん哲学カフェがないのは残念なことです。

がん哲学カフェの起源は樋野興夫先生（順天堂大学医学部病理・腫瘍学 前教授）のがん哲学外来（言葉の処方箋を出す場）です。樋野先生はがん哲学外来の必要要件を言語化する手段として『がん哲学外来市民学会』を立ち上げ、第12回目の市民学会は京都の地で行われました（京都大会長：武藤）。この市民学会では、患者・家族はがんとともに生きていく上で、病気を治すことだけでなく、人とのつながりを感じ、尊厳を持って生きることを強調しています。まさに社会共生です。

今回の特集では、第12回がん哲学外来市民学会で御発表いただいた先生方に執筆いただきました。執筆者の先生方に感謝申し上げるとともに、読者の皆様にはこの特集を通じてがんのような働く世代の死亡原因1位の疾患でも、予防が可能であり、『病気であっても病人ではない社会をつくる』ことができることを実感いただければ大変嬉しく思います。